

‘My Lord/Lady’ vs. ‘Your Lordship/Ladyship’: ポライトネスの観点からの考察

北山 環

1. 序

呼称には、大別して、直接相手に‘触れない’敬避的な「遠隔化的呼称（敬称）」（滝浦, 2007: 34）と、相手を名指しする共感的な「近接化的呼称（親称）」（滝浦, 2008: 78）とがある。前者は、‘Title + Surname’（例：Mr. Jones, Mrs. Smith）や ‘Honorifics’（例：sir, madam）に代表され、後者は、‘First name’（例：Tom, Mary）や ‘Familiarisers’（例：buddy, mate）が典型とされている（Leech, 1999: 110）。¹ これら二つの敬称と親称の区分は、ポライトネス理論では、相手の領域に踏み込まない言語行動と相手との仲間意識を助長するそれとの対比として検証され、‘negative vs. positive politeness’（Brown & Levinson, 1978/1987）、‘distance vs. involvement’（Tannen, 1986）、‘autonomy vs. connection’（Green, 1992）、‘self-determination vs. acceptance’（Janney & Arndt, 1992）、‘independence vs. involvement’（Scollon *et al.*, 1995/2012）、‘distance vs. expressiveness’（Andersen *et al.*, 2002）、‘indirectness vs. directness’（House, 2003）、‘restraint vs. expressiveness’（Spencer-Oatey & Franklin, 2009）等、多くの類似した範疇と呼応する。

召使から主人に向けての発話は、当然のことながら、相手の領域を侵さず、距離を置いてなされ、呼称は相手を直接的に特定しない敬称が使用される。英国の貴族階級所帯内においては、‘Your Grace’ 或いは、‘Duke/Duchess’ と呼ばれる公爵（Duke / The Duke of (*Sinon*）・公爵夫人（Duchess）以外の貴族である侯爵（Marquis / The Marquis of (*Sinon*））、伯爵（Earl / The Earl of (*Sinon*））、子爵（Viscount / The Viscount (Family name)）、男爵（Baron / Lord (Family name)）、及びその夫人達（Marchioness / Countess / Viscountess / Baroness）は、彼らに仕えている召使達から、‘My Lord / My Lady,’ ‘Your Lordship / Your Ladyship,’ ‘Lord (*Sinon*) / Lady (*Sinon*)²’ と呼ばれる。北山（2011）の検証により、侯爵以下の貴族とその夫人達は、この三つの呼び名のうち、‘My Lord / My Lady’ と呼ばれることが圧倒的に多いことが確認された。そこで、本稿は、映画における‘Your Lordship / Your Ladyship’ の語用をポライトネスの観点から分析し、それが使用される場面を取り上げることで、‘My Lord / My Lady’ の用法と比較検討することを目的とする。分析の結果、前者が後者より相手に対して、より一層心理的な距離を保ち、その使用が特定の状況に限られていることが明らかになった。

以下、第2章は検証方法、第3章は対象呼称の特定、第4章は用語の語源確認、第5章は‘Your Lordship / Your Ladyship’の分析、第6章は結語と続ける。

2. 検証方法

20世紀前半の英国貴族社会をテーマとした作品の中で貴族への呼称が頻繁に現れる5本のイギリス映画³を選び、それぞれの呼称を筆者の聞き取りによって抽出した。そのうち、‘My Lord / My Lady’と‘Your Lordship / Your Ladyship’が同じ登場人物に対して使われる場合は、後者の選択理由を「賦課」の程度 (Brown & Levinson, 1978/1987: 74) の分析によって求めようとした。つまり、ここでは「賦課」(ibid.) の概念を拡大し、ある状況において、いかなる理由で ‘My Lord/My Lady’ ではなく ‘Your Lordship/Your Ladyship’ が使用されているかを考察する。*Gosford Park* の Lady McCordle、*Upstairs Downstairs* の Lady Marjorie がその例であり、通常用いられる ‘My Lady’ ではなく、‘Your Ladyship’ と呼び掛けられる場面が分析される。

3. 対象呼称の特定

呼称の機能は二つあり、相手に呼び掛ける言葉として文とは独立して使われる場合と、文中で誰かを言及するために用いられる場合とがある。これらを表示するために様々な用語が使用されている。‘free form of address & bound form of address’ (Braun, 1988: 11)、‘term of address & term of reference’ (Thomas, 1995: 154; Leeds-Hurwitz, 1980: 2)、‘vocatives & terms/forms of address’ (Leech, 1999: 107)⁴ である。

本稿では、「呼び掛け」(‘vocative’) と「言及」(‘reference’) の両方を検証対象として抽出し考察を行う。

4. 用語の語源確認

身分名 (‘My Lord / My Lady,’ ‘Your Lordship / Your Ladyship’) や領地を含む身分名 (‘Lord Marchmain,’ ‘Lady Trentham’⁵) はもちろんのこと、名前 (‘Lady McCordle,’ ‘Lady Meredith’)、特にファーストネームを用いてもタイトルを付ける (‘Sir William,’ ‘Lady Marjorie’) 場合は敬称となり、召使が主人を呼ぶ時に使用可能な呼称である。ただ、ここで、爵位により呼び方が違うことに注目しなければならない。例えば、*Gosford Park* の Sir William McCordle は、准貴族 (‘Minor nobility’)⁶ の准男爵 (‘Baronet’)⁷ であるから、‘My Lord’ とは呼ばれず、‘Sir’ や ‘Sir William’ と呼ばれる。*Upstairs Downstairs* の Richard Bellamy は、貴族ではないので、‘Sir’ と呼び掛けられ、言及される場合は、‘the master’ か ‘Mr. Bellamy’ が使われる。

- (1) Do you think Sir William was in love with you? (*Gosford Park*: Mary, Lady Trentham's maid, to Elsie, Housemaid at Lady McCordle's household) (下線筆者)
- (2) I've been obliged to inform the master of your unfortunate condition. ... Well, fortunate for you, Mr. Bellamy has received it lenient. (*Upstairs Downstairs*: Hudson, Butler, to Mary, Housemaid) (下線筆者)

それ故、本稿の分析対象となるのは、‘My Lord / My Lady’、‘Your Lordship / Your Ladyship’ と呼ばれる侯爵以下の貴族、及び、その夫人であり、その他にこれらの呼称が用いられる場合は、その理由を明らかにして検証することとする。

先ず、映画での使用場面を論じるに先立って、‘My Lord/My Lady’ と ‘Your Lordship/Your Ladyship’ の語源に遡り、それぞれの単語の有する元来の意味を確かめることで、呼称として用いられる場合の心理的な距離の違いを明示する。

4.1. ‘Lord / Lady’ と ‘Lordship / Ladyship’

‘Lord/Lady’ と ‘Lordship/Ladyship’ という両語群の違いは、前者が「その地位にある人物」を、後者が「その地位」を表しているということである。‘lord’ は、古英語の *hlaford*、更に遡って、*hlafeard* ‘one who guards the loaves’ (*hlafe* ‘bread, loaf’ + *-weard* ‘keeper, guardian’) から由来する言葉であり、‘master of a household, ruler, superior’ を意味し、13世紀半ばから *laverd*, *loverd* と表記されるようになった。‘lady’ は、古英語の *hlæfdige* ‘one who kneads bread’ (*hlafe* ‘bread’ + *-dige* ‘maid’) が ‘mistress of a household, wife of a lord’ を表すようになり (Harper, 2012a/b)、1200年頃から *lafdi*, *lavede* ‘woman of superior position in society’ を意味するようになった。接尾辞の ‘-ship’ は、‘to create, ordain, form, destine’ を表し、古英語の *-scipe* から ‘state, condition of being, rank, office, position, craft, skill, character’ (Harper, 2012c; Dictionary com., 2011) を意味していた。‘lordship’ は、古英語の *hlafordscipe* ‘authority, rule’ に由来し、1300年頃から用いられている (ibid.)。

4.2. ‘My’ と ‘Your’

古英語では二人称の *pū* と *zē* は単数と複数を表わし、単純に数カテゴリーに基づく区別であったが、中英語になると、*thou* と *ye* には数カテゴリーに加えて、親称・敬称の区別が現れた。近代英語では、一般的な二人称代名詞としては、中英語で複数対格に用いられていた *you* だけが残り、複数主格、及び、単数敬称としても用いられるようになった (堀

田, 2010; Wikimedia Foundation, 2011d)。つまり、中英語では、*thou* が親称で、その使用は、‘intimacy, solidarity, engagement, rapprochement, joking, patronizing, cajolery, conspiracy’ (Burnley, 1983: 21) 等と結び付き、*ye* は、‘detachment, distancing, formality, objectivity, rejection, repudiation’ (ibid.) 等の意味を帯びていた (堀田, 2009a)。複数形の代名詞を敬称として使う例は、他のヨーロッパ言語にも見られるが、英語の場合は、相手との距離を大きく取る方向に進み、*you* に統一したことから、T/V distinction の社会的直示性の対立が解消されて現代英語に至っている⁸。

このように、現代英語の *you* は、確かに、もはや敬称とは捉えられないが、一人称の代名詞と比較すると、呼称に使用される場合、相手との距離や表現の間接性が大きいと言える。英語では、前舌母音や高母音は「近い、小さい」印象を、後舌母音や低い母音は「遠い、大きい」印象を与えることが多い (堀田, 2009c) とされている。ある母音が発音される時、舌の位置が上方か下方か、口内の使用が前方か後方かによって音が共鳴する空間の大きさが異なり、小さい場合は高周波を、大きい場合は低周波を生じさせる。その結果、前者は小さいものを、後者は大きいものを連想させる。

When the tongue is high and at the front of the mouth, it makes a small resonant cavity there that amplifies some higher frequencies, and the resulting vowels like *ee* and *i*...remind people of little things. When the tongue is low and to the back, it makes a large resonant cavity that amplifies some lower frequencies, and the resulting vowels like *a*...and *o*...remind people of large things. (Pinker, 1994/2007: 162-163)

‘Lord/Lady’ に付く ‘My’ と ‘Lordship/Ladyship’ に付く ‘Your’ に含まれる母音は、殆どの場合、それぞれの弱形の [i] と [o/ə/ɚ] が使用され、[i] は小さいもの (「私」)、[o] は大きいもの (「あなた」) を想起させる。一人称代名詞は「近い」語として前舌母音を用いる傾向があるのに対して、二人称代名詞は「遠い」語として後舌母音へ偏っている (堀田, 2009a) のである。

以上の考察により、‘you’ が敬称として使用されていたこと⁹、‘my’ が近しい存在を ‘you’ が遠い存在を示すこと、‘-ship’ の有無でその状態・地位か人物かのどちらかを表すことが語源的にも明らかになったことから、‘My Lord / My Lady’ と ‘Your Lordship / Your Ladyship’ では、後者の方がより遠い存在に対しての、間接性の度合いが遥かに高い呼称であると確認することが出来た。¹⁰

この分析に基づいて、次章では、映画に現れる ‘Your Lordship/Your Ladyship’ が ‘My

Lord/My Lady’ に比して、間接性の高さが要求されるどのような場面で使用されているかを論じていく。

5. ‘Your Lordship / Your Ladyship’ の分析

本稿で扱う映画は、*Brideshead Revisited* (1981)、*Gosford Park* (2001)、*The House of Eliott* (1991)、*The Remains of the Day* (1993)、*Upstairs Downstairs* (1971) である。それぞれの作品の中で、‘Lordship’ ‘Ladyship’ と呼ばれているのは、*Brideshead Revisited* では、Lord Marchmain (侯爵)、Lady Marchmain (侯爵夫人)、Julia (侯爵の娘)、*Gosford Park* では、Lady Trentham (伯爵夫人)、Lady McCordle (准男爵夫人、伯爵の娘)、Lord Stockbridge (爵位不詳)、Lord Rupert Standish (爵位不詳)、*The House of Eliott* では、Lady Finehurst (爵位不詳)、Lady Lydia (爵位不詳)、*The Remains of the Day* では、Lord Darlington (爵位不詳)、*Upstairs Downstairs* では、Lady Marjorie (平民の妻、伯爵の娘) である。彼らは、第三者として文中で言及される時に、‘he’ ‘she’ の代わりに ‘his lordship’ ‘her lordship’ と呼ばれることがあり、その呼称は、召使からだけではなく、主人側が召使に話す場合にも用いられる。代名詞のみの使用を避け、遠隔化的呼称を用いることで、言及されている第三者に対しての丁寧さと畏敬の念が増強するのである。個人を特定せず、地位で人を表す ‘lordship’ ‘ladyship’ は、その語感の間接性において、対面していない目上の人物に言及する状況での用途に適していると言える。以下に召使間、召使と主人側の間で使用された ‘his lordship’ ‘her ladyship’ の例を幾つか挙げる。

- (3) Her ladyship said to ask the lord, and so I said to him she said to ask his lordship. His lordship said to ask the lawyers. (*Brideshead Revisited*: Wilcox, Butler, to Sebastian, the second son of the master’s family, and Charles, his friend, referring to Lord and Lady Marchmain 召使→主人の息子とその友人) (下線筆者)
- (4) Her ladyship says Sir William loves his shooting. (*Gosford Park*: Mary, Lady Trentham’s maid, to Elsie, Head Housemaid at Lady McCordle’s household, referring to Lady Trentham 召使→他家の召使) (下線筆者)
- (5) I’ll ask her ladyship if we’re to lay luncheon in the dining room. She may want a tray upstairs. (*Gosford Park*: Mrs. Wilson, Housekeeper, to Dorothy, Still Room Maid, referring to Lady McCordle 召使→召使) (下線筆者)

- (6) I'll be leaving with his lordship after all. (*Gosford Park*: Lady Stockbridge to Renee, her maid, referring to her husband, Lord Stockbridge 主人→召使) (下線筆者)
- (7) Do you think lacy books are to be found in his lordship's shelves? (*The Remains of the Day*: Stevens, Butler, to Kenton, Housekeeper, referring to Lord Darlington 召使→召使) (下線筆者)
- (8) Do you think his lordship would put me up tonight? (Cardinal, Lord Darlington's godson, to Stevens, Butler, referring to Lord Darlington 主人側→召使) (下線筆者)
- (9) You realise, of course, if her ladyship hadn't been in the country, I'd have been compelled to pack you up at once without a reference. (*Upstairs Downstairs*: Hudson, Butler, to Mary, Housemaid, referring to Lady Marjorie 召使→召使) (下線筆者)
- (10) And provided, of course, her ladyship and yourself will not require me for the rest of the afternoon. (*Upstairs Downstairs*: Hudson, Butler, to Mr. Bellamy, referring to Lady Marjorie 召使→主人) (下線筆者)
- (11) Will you ask her ladyship to come down? (*Upstairs Downstairs*: Mr. Bellamy to Hudson, Butler, referring to his wife, Lady Marjorie 主人→召使) (下線筆者)

同じ人物を第三者として丁寧と呼ぶ場合の他の遠隔化的呼称例としては、'the lord' (*Brideshead Revisited*: Wilcox, Butler, to Sebastian, the second son of the master's family, and Charles, his friend, referring to Lord Marchmain)、'the lady' (*Brideshead Revisited*: Julia, the eldest daughter of the master's family, to Velace, Maid, referring to Lady Marchmain)、'Lady Trentham' (*Gosford Park*: Mrs. Wilson, Housekeeper, to Mary, Lady Trentham's maid)、'her mistress' (*Gosford Park*: George, First Footman, to Lewis, Lady McCordle's maid, referring to Lady McCordle)、'Lady Sylvia' (*Gosford Park*: Thompson, the police inspector, to Lady Trentham, referring to her niece, Lady McCordle)、'Lord Darlington' (*The Remains of the Day*: Stevens, Butler, to Kenton,

Housekeeper)、‘Lady Marjorie’ (*Upstairs Downstairs*: Roberts, Lady’s Maid, to Mary, Housemaid) が挙げられる。文中で第三者として言及する場合には、‘my lord’ ‘my lady’ の使用は一例も見られない。

5.1. *Brideshead Revisited*

Julia は侯爵の娘であるから、本来、呼称に ‘ladyship’ は使用されず、‘My Lady’ か ‘Lady Julia’ が妥当である。¹¹ しかし、列車の車掌は、Julia に対して、‘Your Ladyship’ と呼び掛けている。荷物を運び、チップをもらった時に、見ず知らずの貴婦人の客に対して一段上の敬称を使ったと考えられる。

(12) Thank you, Your Ladyship. I’ll just go to make sure your luggage is safely stored. (下線筆者)

5.2. *Gosford Park*

Gosford Park では、二つの状況下で ‘Your Lordship’ ‘Your Ladyship’ が用いられた。先ず、週末に館に招待した客が到着した際に、主催者側の召使が、その呼称で招待客に呼び掛ける場合である。

(13) Your Ladyship. Your Lordship. (Jennings, Butler, to Lady Stockbridge and Lord Stockbridge) (下線筆者)

(14) Good evening, Your Lordship. ... Yes, of course, Your Lordship. (Elsie, Head Housemaid, to Lord Rupert Standish) (下線筆者)

それぞれ初めて顔を合わせた仲ではないが、客の到着を正式に受け止める場面で距離を置いた呼称の使用となっている。これらは、所帯が違う他家の主人に対して発せられた呼び掛けであるが、初めて言葉を交わす他の所帯の貴族に向けられた呼び掛けの例として、以下が挙げられる。

(15) I am, Your Ladyship. (Henry, Morris Weissman’s Valet, to Lady McCordle) (下線筆者)

これは自分の主人が肉食主義者であるということをいち早く主催者側の召使に知らせた

機転に対して、Lady McCordle が、その場にいる他家の召使達に向けて、“Which one of you is Mr. Weissman’s valet?” と聞いた時の従者の答えである。Henry はその後、Lady McCordle と親しく話をするようになるが、その時は、Lady McCordle を ‘milady (My Lady)’¹² と呼んでいる。

二番目の状況は、多くの人が集う場での自分の主人を呼ぶ場面である。招待客達が集まってお茶を飲んでいる時に、Footman の George は Lady McCordle に通常用いている ‘milady’ ではなく、‘Your Ladyship’ を使って呼び掛ける。

(16) Are you finished, Your Ladyship? Or would you like some more tea? (George, First Footman, to Lady McCordle) (下線筆者)

また、Mr. Weissman に出す料理について慌てた Lady McCordle が階下で食卓を囲んでいる様々な所帯の召使達の前に現れた時、Housekeeper の Mrs. Wilson は、自分の主人に対して ‘Your Ladyship’ を用いている。

(17) Everything is under control, Your Ladyship. (Mrs. Wilson, Housekeeper, to Lady McCordle) (下線筆者)

日常的に対面して話す時は、‘My Lady’ と呼び掛けていても、複数の外部者がいる状況では、一層の距離を置く敬称を使用して所帯の地位の高さと規律を印象づけようとしていることが分かる。因みに、Sylvia McCordle は、准男爵である Sir William McCordle 夫人であるから、‘My Lady’ か 夫の名字を使って ‘Lady McCordle’ と呼ばれるのが正式であるが、伯爵の娘であるため、この場面では儀礼的に ‘Your Ladyship’ が使われていると考えられる。名前に言及する場合も、准貴族の妻としての ‘Lady McCordle’ ではなく、伯爵の娘としての ‘Lady Sylvia’ と個人名で呼ばれる時がある。

(18) He (Mr. Novello) says it was a joke on Lady Sylvia, but I can’t see that. (Bertha, Head Kitchen Maid, to Ellen, Kitchen Maid) (括弧内注および下線筆者)

5.3. *The House of Eliot*

姉妹で小さなブティックを開いた Evangeline とお針子の Tilly が顧客である Lady Finehurst と仮縫いの話をしている時に、独立した呼び掛けにも文中での言及にも ‘Your Ladyship’ を使う場面がある。

(19) Yes, of course, Your Ladyship. (Evangeline to Lady Finehurst) (下線筆者)

(20) We think nothing else but your ladyship’s pleasure, Lady Finehurst. (Tilly to Lady Finehurst) (下線筆者)

これは、店を開いてまもない人間が客のドレスを初めて作る機会を得た状況での台詞である。

その他、所帯内での使用は、次の例に見られる。

(21) Would there be anything else, Your Ladyship? (Chalmers, Lady’s Maid, to Lady Lydia) (下線筆者)

Lady’ Maid が紅茶を持ってきた時に使っているが、背景には、Lady Lydia の息子、Arthur が警察に捕まっていることがあり、その呼称は、常々感情的な主人の一層張りつめた心情を察知して召使により選ばれたと分析することが可能である。Chalmers は通常 Lady Lydia を ‘My Lady’ と呼んでいる。

5.4. *The Remains of the Day*

主人の性格や互いの関係の深さにもよるが、比較的近い立場から主人に接している召使が主人に直接呼び掛ける場合は、‘My Lord’ か ‘sir’ が、また文中では ‘you’ が使われる。執事の Stevens から Lord Darlington への呼称の典型的な使用例が次の文に現れている。

(22) Might I have a word with you, sir. My Lord, it’s regarding the under-butler and the housekeeper ... replacement, sir. (下線筆者)

(23) My Lord? I’m afraid I don’t quite follow you, sir. (下線筆者)

‘Your Lordship’ は使われず、その代わりに ‘you’ は ‘sir’ とともに用いられたり、‘My Lord’ と ‘sir’ が巧みに使い分けられたりしている。

5.5. *Upstairs Downstairs*

‘Lady Marjorie’ のフルネームは、Lady Marjorie Helen Sybil Bellamy であり、旧姓は、Lady Marjorie Helen Sybil Talbot-Carey である。料理人の Mrs. Bridges も説明している

ように、12代目 The Earl of Southwold (伯爵) の長女という設定である (Wikimedia Foundation, 2011c)。平民と結婚しているが、夫の名前を使った 'Mrs. Bellamy' とは呼ばれず、'My Lady' 'Lady Marjorie' と伯爵の娘としての呼称が使われるのが正式¹³である。彼女は、所帯内の召使からは、対面では、通常、'My Lady' と呼び掛けられ、言及される場合は、'her ladyship' や 'Lady Marjorie' と呼ばれている。

- (24) Why don't you give in a notice, and not take advantage of the master being soft while Lady Marjorie being away? (Roberts, Lady's Maid, to Mary, Housemaid)
(下線筆者)

Lady Marjorie の身分からすれば、'ladyship' は本来使用される呼称ではないが、優雅で沈着冷静な貴婦人の風格を持つ主人に対する召使の尊敬の念を表現するためにその用語が選ばれていると考えられる。この作品で 'your ladyship' が使われたのは、一か所で、赤ん坊を誘拐した未亡人の Mrs. Bridges を助け、その寂しさを共有するために彼女と結婚することを決意した執事の Hudson が、自分の気持ちを Lady Marjorie に伝える場面に現れる。

- (25) She (Mrs. Bridges) agreed we should both be in unattached,... as it were, reserve ourselves for each other, and not in distant future, ... whilst continuing, in the meanwhile, your ladyship's services... (括弧内注および下線筆者)

執事の Hudson は、主人も巻き込み警察沙汰にもなった事件に対して、召使の長として謝罪の気持ちがあり、また、伴侶となる女性との個人的な将来の計画を話す遠慮もある。そのことで、主人とはより距離を取った呼称を用いていると分析できる。

6. 結語

これまで二種類の遠隔化的敬称を「呼び掛け」と「言及」の両方の用例で考察してきたが、その結果 'My Lord' 'My Lady' は語源的にも語用的にも、自分の領域に相手を引き込む呼び名であることが明らかになった。'My' の中に含まれる母音 [i] の持つ「近い、小さい」という響きに 'Lord/Lady' という「相手」を指し示す名詞が結び付いた呼称は、日常的に接し情動的に近い主従関係、例えば、*The Remains of the Day* の Stevens と Lord Darlington の関係で使用され、自分が仕えている主人以外の貴族には、*Gosford Park* の Henry と Lady McCordle のように親しい関係になった場合を除き、用いられて

いない。また、第三者として主人に言及する場合は、対面での会話よりも間接的な描写となるので使われてはいなかった。

これに対し、‘Your Lordship’ ‘Your Ladyship’ は、[o] の音を含む ‘Your’ で「遠い、大きい」相手を連想させ、‘Lordship/Ladyship’ という「身分」と結び付くことにより、相手と大きく距離を保ち、相手を「人」ではなく、「地位」や「状態」によって婉曲的かつ間接的に表す呼称である。それ故に、‘his lordship’ ‘her ladyship’ が文中で ‘he’ ‘she’ の代わりに使われるのと同様に、直示を避けるために ‘you’ に代わって文中に現れる場合もある。*Upstairs Downstairs* の執事の Hudson が Lady Marjorie に対して用いた ‘your ladyship’ がそれに該当する。一方、文脈とは独立して呼び掛けとして使用される典型的な例は、*Gosford Park* の招待客や *The House of Eliott* の顧客や *Brideshead Revisited* の乗客等、外部の貴族を呼ぶ状況、或いは、*Gosford Park* の First Footman の George や Housekeeper の Mrs. Wilson の場合のように所帯外の間が多く集まっている時に自分の主人を呼ぶ場面に見られる。更に、日常的に主人と近い関係にあっても、*The House of Eliott* の Lady Lydia の Maid の Chalmers のように、何らかの理由で気遣いや遠慮をしなければならない背景があって主人を遠い存在として見る気持ちが働いた場合にも選ばれている。要約すると、これらは全て、‘My Lord/My Lady’ を使うことが躊躇われる以下のような状況で用いられる。

- ・日常的に接していず、直接的な主従関係もない所帯外の貴族を呼ぶ。
- ・自分の主人ではあっても、所帯外の複数の人間の前で正式に主人への礼節と尊敬の念を表し、その身分の高さを強調する。
- ・平常ではない緊迫した状況下にあって召使が主人に呼び掛けることに特別な配慮が必要となる。

このように本稿の考察では、‘My Lord/My Lady’ という召使から主人への頻度の高い呼び方ではなく ‘Your Lordship/Your Ladyship’ が用いられる状況が映画を通じて分析され、‘My Lord/My Lady’ の用法とは異なる話し手と聞き手の関係およびその場の心理的な「賦課」の度合が特定されるに至った。

注

- 1 この区分の仕方は、Leech (1999) によるものだが、同様の分類の仕方は、Quirk *et al.* (1985: 773-775) の 'Last name' & 'Title of respect' と 'First name' & 'Epithet'、及び、Braun (1988: 9-10) の 'Mr/Mrs forms' & 'Abstract nouns' と 'Names' & 'Terms of endearment' の対比も見られる。
- 2 Wikimedia Foundation (2011a) による。尚、ノラ (2011) は、子爵と男爵の呼び名は、'Lord (*Sinon*)' ではなく、'Lord (Family name)' としている。領地の保有が19世紀以前の伯爵以上の旧貴族に許されていたとすると、こちらの指摘の方が正しい。因みに、19世紀以降の新貴族には領地の特権所有が廃止された (ミステリ MEMO, 2011)。
- 3 イギリス映画の定義は、北山 (2007: 40) に呈示されているように、British Film Institute (1999) が出した以下の6つの 'UK Film Categories' による。
 - ・ **Category A** Films where the cultural and financial impetus is from the UK and the majority of the personnel are British
 - ・ **Category B** Majority UK Co-Productions. Films in which, though there are foreign partners, there is a UK cultural content and a significant amount of British finance and personnel
 - ・ **Category C** Minority UK Co-Productions. Foreign (non-US) films in which there is a small UK involvement in finance or personnel
 - ・ **Category D** American films with a UK creative and/or minor financial involvement
 - ・ **Category D₁** American financed or part financed films made in the UK. Most films have a British cultural content.
 - ・ **Category D₂** American films with some UK financial involvement

本稿に使用した映画 (テレビドラマ *The House of Eliott*、*Upstairs Downstairs* を含む) は、Category A である *Brideshead Revisited*、*The House of Eliott*、*Upstairs Downstairs* の他、いずれも 'a British cultural content' (ibid.) を有している点で製作や監督や主役がアメリカ、アメリカ人であったとしても上記の Category B, D, D₁ のいずれかの区分に合致しており、「イギリス映画」として採用できるものである。また、映画を素材とした理由は、それが、(1) 背景を含めた会話の流れを持つ (2) 発話する人間像 (パーソナリティー) が得られる (3) 日常の発話行為とその状況が近似している (4) 原則として会話により構成されているので、表現のバリエーションを

集中的に収集し易い (5) 使用されている表現が学習や研究目的ではないので、その意味での作為が見られない (6) 比較的入手が簡単である、からである (北山, 2004, 74)。

- 4 Levinson (1983: 70-71)、Quirk *et al.* (1985: 773) とも前者を ‘vocatives’ と呼んでいる。
- 5 ‘Marchmain’ は、Alexander Flyte が ‘The Marquis of Marchmain’ (Wikimedia Foundation, 2012) であることから氏名ではなく領地名であることが分かる。また、‘Trentham’ は、Constance が ‘The Countess of Trentham’ (Fellowes, 2002: viii) と紹介されていることから領地名であることが明らかである。
- 6 准貴族には、准男爵の下位の位として、ナイト爵 (‘Knight’) がある。彼らの正式名称は、‘Sir (Full name)’ であり、呼称には、‘Sir’ や ‘Sir (First name)’ が使われる。因みに、呼称としての ‘Sir’ が名前を伴う時 (准貴族) は、‘First name’ を、‘Lord’ の場合は領地 (‘*Sinon*’) (侯爵、伯爵、及びその長男) か ‘Family name’ (子爵、男爵、及びその長男) を従える。‘Lady’ の場合は、爵位により、領地 (侯爵夫人、伯爵夫人) か夫の家族名 (子爵夫人、男爵夫人、准貴族の夫人) かファーストネーム (公爵、侯爵、伯爵の未婚或いは平民と結婚した娘) が用いられる。
- 7 召使同士の会話で、“Her mistress (‘Lady McCordle’) married a baron, so she lost her rank as an earl’s daughter.” (*Gosford Park*: George, First Footman, to Lewis, Lady’s Maid) (下線筆者) という台詞があるが、Lady Trentham が、William の傍若無人さを “Worse since they made him a baronet.” (ibid.; 下線筆者) と言っていることから、何らかの理由で准男爵に降格されたと考えられる。
- 8 堀田 (2009b) による。Jespersen (1933: 137) は、“In the Middle Ages people began to use the plural forms in addressing one person, at first respectfully to superiors, then politely to equals, and finally to everybody....” と述べている。また、Curme (1931: 152) は、“...the form of polite address became general in common intercourse of life, the one form of *you* serving without distinction of rank or feeling for one or more persons and for the nominative, dative, and accusative relation.” と論じている。
- 9 Svartvik & Leech (2006: 211) は、‘Your Majesty, Your Grace, Your Highness, Your Lordship, Your Honour’ 等の高位の人への呼び掛けの ‘Your’ はかつての敬称である ‘you’ の所有格であると論じている。
- 10 小田 (2010: 113) は、‘positive epithet’ は ‘my’ と ‘you’ のどちらとも共起するが、‘negative epithet’ は、‘you’ とのみ共起すると述べている。しかし、‘positive epithet’

は一般的には ‘my’ と共起し、‘my sweet-pie’ は単に聞き手に対する話し手の愛情や親しみを表すが、‘you sweet-pie’ は聞き手に対する話し手の冗談や皮肉を表すことが多いと付け加えて論じている (ibid.:184)。例えば、自分に近い存在として肯定的に親愛の情を込めて呼び掛ける場合は、‘my dear, my love, my sweet’ のように ‘my’ が付くが、相手を遠い存在として突き放す場合は、‘you idiot, you bastard, you snake’ のように ‘you’ が用いられる。そして、‘grace’ ‘lordship’ ‘ladyship’ のように状態・地位・性質を表す抽象名詞には ‘your’ が、‘idiot’ ‘bastard’ ‘snake’ のように人を示す具体名詞には ‘you’ が付加される。

- 11 貴族、及びそれに準ずる人々の口頭での呼び名の例は以下の通りである。

<i>Nobility: Peers and peeresses</i>	
Duke (The Duke of (<i>Sinon</i>))	Your Grace / Duke
Duchess	Your Grace / Duchess
Marquis (The Marquis of (<i>Sinon</i>))	My Lord / Your Lordship / Lord (<i>Sinon</i>)
Marchioness	My Lady / Your Ladyship / Lady (<i>Sinon</i>)
Earl (The Earl of (<i>Sinon</i>))	My Lord / Your Lordship / Lord (<i>Sinon</i>)
Countess	My Lady / Your Ladyship / Lady (<i>Sinon</i>)
Viscount (The Viscount (Family name))	My Lord / Your Lordship / Lord (<i>Sinon</i>)
Viscountess	My Lady / Your Ladyship / Lady (<i>Sinon</i>)
Baron (Lord (Family name))	My Lord / Your Lordship / Lord (<i>Sinon</i>)
Baroness	My Lady / Your Ladyship / Lady (<i>Sinon</i>)
<i>Minor nobility</i>	
Baronet (Sir (Full name))	Sir / Sir (First name)
Baroness	My Lady / Lady (Husband’s family name)
Knight (Sir (Full name))	Sir / Sir (First name)
Knight’s wife	My Lady / Lady (Husband’s family name)

<i>Eldest sons, younger sons, daughters of the nobility</i>		
<i>(Eldest sons of dukes, marquises and earls use their father’s most senior subsidiary title as courtesy titles: note the absence of “The” before the title. If a daughter of a peer or courtesy peer marries another peer or courtesy peer, she takes her husband’s rank. If she marries anyone else, she keeps her rank and title, using her husband’s surname instead of her maiden name.)</i>		
Eldest son	Courtesy Marquis (Marquis of (<i>Sinon</i>))	My Lord / Lord (<i>Sinon</i>)
	Courtesy Earl (Earl of (<i>Sinon</i>))	My Lord / Lord (<i>Sinon</i>)
	Courtesy Viscount (Viscount of (<i>Sinon</i>))	My Lord / Lord (<i>Sinon</i>)
	Courtesy Baron (Lord (<i>Sinon</i>))	My Lord / Lord (<i>Sinon</i>)
Duke’s younger son, (Courtesy) Marquis’s younger son		My Lord / Lord (First name)

(Courtesy) Earl’s younger son, (Courtesy) Viscount’s son, (Courtesy) Baron’s son	Sir / Mr. (Family name)
Duke’s daughter, (Courtesy) Marquis’s daughter, (Courtesy) Earl’s daughter (unmarried or married to a commoner)	My Lady / Lady (First name)
(Courtesy) Viscount’s daughter, (Courtesy) Baron’s daughter (unmarried)	Madam / Miss (Family name)
(Courtesy) Viscount’s daughter, (Courtesy) Baron’s daughter (married to a commoner)	Madam / Mrs. (Family name)

(Wikimedia Foundation, 2011a; 北山, 2011: 3-4, 12)

- 12 ‘My Lord’ の場合は、‘milord’ 或いは ‘m’lord’ と表記される場合がある。
- 13 イギリスにおける正式な貴族 (peer) は、当主一人であるが、その家族も身分に合った儀礼的な称号 (Courtesy title) で呼ばれる。儀礼称号は、特定の爵位、またはそれに関連する称号で称することを許されたに過ぎず、身分は平民 (commoner) である。尚、伯爵夫人等の当主の夫人の称号は正式な称号である。(Wikimedia Foundation, 2011b) Lady Marjorie の場合、夫の Mr. Bellamy とともに呼ばれる場合でも、‘my lady and the master’ (Hudson, Butler, to Lady Marjorie) が使われている。

Featured Films

Brideshead Revisited. (1981). Directed by Michael Lindsay-Hogg and Charles Sturridge.

Based on the Novel by Evelyn Waugh. Teleplay by John Mortimer.
Granada Television.

Gosford Park. (2001). Directed by Robert Altman. Screenplay by Julian Fellowes. USA Films.

House of Elliott, The. (1991). Directed by Rodney Bennett and Jeremy Silberston.
Written by Evgeny Gridneff *et al.* BBC.

Remains of the Day, The. (1993). Directed by James Ivory. Based on the Novel by Kazuo Ishiguro. Screenplay by Ruth Prawer Jhabvala. Columbia Pictures, Inc.

Upstairs Downstairs. (1971). Directed by Derek Bennett *et al.* Written by Alfred Shaughnessy *et al.* ITV.

参考文献

- Andersen, P. A., M. L. Hecht, G. D. Hoobler, and M. Smallwood (2002) Nonverbal communication across cultures. In W. B. Gudykunst & B. Mody (eds.), *Handbook of international and intercultural communication*, 2nd edition, Thousand Oaks: Sage, pp. 89-106.
- Braun, F. (1988) *Terms of address: Problems of patterns and usage in various languages and cultures*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Brown, P., and S. C. Levinson (1978/1987) *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- British Film Institute (1999) *BFI film and television handbook 1999*. London: BFI.
- Burnley, D. (1983) *The language of Chaucer*. Basingstoke: Macmillan Education.
- Curme, G. O. (1931) *Parts of speech and accidence*. Boston: D. C. Heath and Company.
- Fellowes, J. (2002) *Gosford Park*. New York: Newmarket Press.
- Green, G. (1992) The universality of Gracian accounts of politeness: You gotta have wa. Unpublished manuscript. University of Illinois.
- House, J. (2003) Misunderstanding in intercultural university encounters. In J. House, G. Kasper & S. Ross (eds.), *Misunderstanding in social life: Discourse approaches to problematic talk*. London: Longman, pp. 22-56.
- Janney, R. W., and H. Arndt (1992) Intracultural tact versus intercultural tact. In R. J. Watts, S. Ide & K. Ehlich (eds.), *Politeness in language: Studies in its history, theory and practice*. Berlin: Mouton de Gruyter, pp. 21-41.
- Jespersen, O. (1933) *Essentials of English grammar*. London: George Allen & Unwin.
- Leeds-Hurwitz, W. (1980) The use and analysis of uncommon forms of address. *Sociolinguistic Working Paper* 8: 1-18.
- Leech, G. (1999) The distribution and function of vocatives in American and British English conversation. In H. Hasselgård & S. Oksefjull (eds.), *Out of Corpora: Studies in honour of Stig Johanson*. Amsterdam: Rodopi, pp. 107-118.
- Levinson, S. C. (1983) *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Pinker, S. (1994/2007) *The language instinct*. New York: Harper Perennial Modern Classics.
- Quirk, R., S. Greebaum, G. Leech, and J. Svartvik (eds.) (1985) *A comprehensive*

grammar of the English language. London: Longman.

Scollon, R., S. W. Scollon, and R. H. Jones (1995/2001/2012) *Intercultural communication: A discourse approach*. Chichester: Wiley-Blackwell.

Spencer-Oatey, H., and P. Franklin (2009) *Intercultural interaction: A multidisciplinary approach to intercultural communication*. Basingstoke: Palgrave Macmillan.

Svartvik, J. and G. Leech (2006) *English: One tongue, many voices*. Basingstoke: Palgrave Macmillan.

Tannen, D. (1986) *That's not what I meant*. New York: Ballantine Books.

Thomas, J. (1995) *Meaning in interaction: An introduction to pragmatics*. London: Longman.

小田希望 (2010) 『英語の呼びかけ語』 大阪：大阪教育図書

北山環 (2004) 「アメリカ映画に見るポライトネスの一考察— 1980年代から1990年代のビジネス場面におけるリクエスト表現の分析—」 『近畿大学語学教育部紀要』 第4巻 第1号：65-125.

北山環 (2007) 「イギリス映画に見るリクエスト表現の一考察— 20世紀初期の 'Upstairs' 'Downstairs' における談話を分析して—」 『近畿大学語学教育部紀要』 第7巻 第2号：39-64.

北山環 (2011) 「英国貴族階級所帯内労働関係における呼称の検証— 20世紀前半を時代背景とする映画を分析して—」 『近畿大学教養・基礎教育センター紀要 (外国語編)』 第1巻 第2号：1-16.

滝浦真人 (2007) 「呼称のポライトネス— “人を呼ぶこと” の語用論」 『月刊日本語』 Vol. 36 No. 12: 32-39.

滝浦真人 (2008) 『ポライトネス入門』 東京：研究社

参考 WEB ページ

Dictionary.com. (2011) Find the meaning and definition of words. Accessed on January 7, 2011. Available from <<http://dictionary.reference.com/browse/-ship>>.

Harper, D. Online (2012a) Etymology Dictionary. Accessed on September, 5, 2012. Available from <http://www.etymonline.com/index.php?allowed_in_frame=0&search=lord&searchm...>.

- Harper, D. (2012b) Online Etymology Dictionary. Accessed on September 5, 2012. Available from <http://www.etymonline.com/index.php?allowed_in_frame=0&search=lady&searchmo...>.
- Harper, D. (2012c) Online Etymology Dictionary. Accessed on August, 27, 2012. Available from <http://www.etymonline.com/index.php?allowed_in_frame=0&search=-ship&search...>.
- Wikimedia Foundation. (2011a) Forms of address in the United Kingdom. Accessed on January 6, 2011. Available from <http://en.wikipedia.org/wiki/Forms_of_address_in_the_United_Kingdom/htm>.
- Wikimedia Foundation. (2011b) 英語史 Accessed on January 6, 2011. Available from <<http://ja.wikipwdia.org/wiki/%E5%84%80%E7%A4%BC%E7%A7%B0%E5%8F%B7>>.
- Wikimedia Foundation. (2011c) Upstairs Downstairs. accessed on January 6, 2011. Available from <http://en.wikipedia.org/wiki/Upstairs,_Downstairs>.
- Wikimedia Foundation. (2011d) 英語史 Accessed on July 10, 2011. Available from <<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%8B%B1%E8%AA%9E%E3%81%AE%E4%BA%...>>.
- Wikimedia Foundation. (2012) Brideshead Revisited. Accessed on September, 3, 2012. Available from <http://en.wikipedia.org/wiki/Brideshead_Revisited>.
- ノラ (2011) Nobletitle. Accessed on January 6, 2011. Available from <<http://web.thn.jp/blueleo/nobletitle.htm>>.
- 堀田隆一 (2009a) 英語史ブログ : personal pronoun. Accessed on July 10, 2011. Available from <http://c-faculty.chuo-u.ac.jp/~rhotta/course/2009a/hellog/cat_personal_pronoun.html>.
- 堀田隆一 (2009b) 英語史ブログ Accessed on July 10, 2011. Available from <<http://c-faculty.chuo-u.ac.jp/~rhotta/course/2009a/hellog/2009-10-11-1.html>>.
- 堀田隆一 (2009c) 英語史ブログ accessed on July 10, 2011c. Available from <<http://c-faculty.chuo-u.ac.jp/~rhotta/course/2009a/hellog/2009-12-25-1.html>>.
- 堀田隆一 (2010) 英語史ブログ Accessed on July, 10, 2011. Available from <<http://c-faculty.chuo-u.ac.jp/~rhotta/course/2009a/hellog/2010-2-12-1.html>>.
- ミステリ MEMO. (2011) 「宗教と風俗：貴族の世界（欧州編）」 Accessed on January 6, 2011. Available from <http://www003.upp.so-net.ne.jp/detective_story/memo/memo08_aristocrat.htm>.